

## 新渡戸稲造と修養

—西洋体験を手がかりとして—

森 上（青柳）優 子

### はじめに

新渡戸稲造（1862（文久2）－1933（昭和8））は、近代日本を代表するキリスト者のひとりとして知られる人物である。彼は、国際人として活躍する一方で、教育者として第一高等学校長の役職に就く傍ら、『修養』（1911（明治44））、『世渡りの道』（1912（大正1））、『自警』（1916（大正5））などの修養に関する著作を刊行し、それらはいずれもベスト・セラーとなった。<sup>(1)</sup>

新渡戸は、『世渡りの道』の序で、『修養』と『世渡りの道』との関係性について、前者は「主として自己の修養即ち己に対する務」を説き、後者は「他人に対する関係義務」を主題としたと語っている。（『世渡りの道』『全集』8巻 p.7）これらの中で、新渡戸は自己修養について、隠遁というような自己が置かれた境遇からの逃避という方法を否定し、「厭までも世と共に移り、塵の世に交わりながら、品性を磨き以て人たるの義務を完うせねばならぬ」と、「実際の境遇」のなかで行うべきことを主張した。（『世渡りの道』前掲 p.7）

このように、自己が生きる「塵の世」、すなわち、他者との関係性において人間の修養は実践されなければならないとする新渡戸は、その「塵」のなかで、自己が周りと同化して「塵」と化するのではなく、「飽までも善意を以て人に交わり、世は情けといふ考を以て人に接」（『世渡りの道』前掲 p.48）する人間関係を期待した。このような人間関係のあり方は、彼が信仰したキリスト教における隣人愛が反映されていると解釈できるであろう。

う。

新渡戸が自己修養を社会生活の中で追求した思想背景には、彼のクェーカー派<sup>(2)</sup>を通じたキリスト教信仰の他にも、西洋を中心とする新渡戸自身の異文化接触の体験があったと考えられるのではないだろうか。

異文化接触と修養との関係性に着目した最近の先行研究としては、『世渡りの道』を、コミュニケーションの観点から考察した照井悦幸氏の論考<sup>(3)</sup>を挙げることができるが、この問題を追求した研究蓄積は豊富とは言えない。そこで、本稿では、先行研究の成果を踏まえつつ、新渡戸の西洋体験を手がかりとして、それが彼の修養論における人間観に及ぼした影響を考察してみたいと思う。

### 1. 異文化接触

新渡戸が西洋文化と接した体験は、少年の頃に遡る。そのことについては、『幼き日の思い出』（1923（大正12））に詳しい。

新渡戸家は盛岡南部藩の上級武士の家柄であり、新渡戸の父十次郎は江戸詰めの重臣であった。そのため、父は江戸での滞在も多く、江戸で見つけたマッチ、オルゴール、ナイフやフォークなどの「舶来品」を、郷里の盛岡へ土産として持ち帰ることが度々であったと言う。新渡戸はそれらを「西洋文明の最初の前ぶれ」（『幼き日の思い出』『全集』19巻 pp.598-599）であったと回想している。また、かかりつけの医師からは、「インク」、「ペ

ン」、「ペンシル」などの英単語を学び、英語学習を体験した。（『幼き日の思い出』前掲 p.614）このように、新渡戸は大都市ではなく、盛岡という東北の片田舎で生活しつつも、幕末の平均的な、また典型的な日本の家庭ではほとんど見る事ができなかった「舶来品」や英語に触れる機会に恵まれており、西洋文明を積極的に摂取した進歩的な家庭という、言わば特別とも言うべき環境のなかで幼少期を過ごしたことがわかる。それらの体験が、新渡戸にとってまだ見ぬ西洋への憧れとなったことは想像に難くないであろう。

その後、新渡戸は1871（明治4）年に、盛岡から上京して叔父太田時敏の養子となる。その叔父からは「外国の知識を学ばぬと偉い人にはなれぬ」（『幼き日の思い出』前掲 p.623）という言葉が聞かされており、新渡戸は立身出世の手段として外国語の重要性を認識していたと考えられる。また、明治初期は、日本と西洋との交流が活発化し、欧化政策のもと、英語学習が認識され始めた時期であった。そして、将来のエリートを目指す青年の間では、英語の学習意欲が高まりを見せていた。ちょうどその時期に、新渡戸は盛岡から上京して、築地の外国人居留地にある英語学校に入学し、その後に旧南部藩主が経営していた共償義塾<sup>(4)</sup>へ通った。そこで使用された教科書はすべて英語であったという。（『幼き日の思い出』前掲 p.632）さらにその後、東京英語学校（後の第一高等学校）へと進んだ新渡戸は、授業はすべてアメリカ人か英国人かによって行われたと語っている。（『幼き日の思い出』前掲 p.636）これらの回想から、新渡戸が受けた学校教育とは、英語学習を通じて西洋の思想や文化に接する機会が豊富であったことがわかるであろう。英語による読書を「唯一の知恵の木」（『幼き日の思い出』前掲 p.645）とまで語る新渡戸は、西洋思想の獲得により、「日本のことを考へたり見たりする時にも、いくらか客観的に見ることが出来るやうになつた」（『内観外望』『全集』6巻 p.354）と語るように、日本の

精神的伝統を客観視する視点、即ち、西洋と日本とを比較する視点を持ち得ることができた。後に、新渡戸は、*Bushido, The Soul of Japan*（1899和訳名『武士道』）を始めとする日本文化論や西洋文化論を多数発表するが、この比較思想的な視点こそ彼の文化論の視座となったのである。

以上から、新渡戸は、留学以前に人格形成期として重要な幼少期に、異文化接触が平均的な日本人と比較すると格段に豊富であったことがわかった。武士の子として生まれ、漢学の素養を身につけつつ、西洋思想にも触れるという生活環境は、新渡戸に国際社会の中で日本人としてのあり方を問う機会を提供したと考えられる。

## 2. 洋行

### (1) 海外で受けた教育

新渡戸が抱く自己の将来像は、東京帝国大学に入学を志望する際に語った、「太平洋の橋になり度と思ひます」という言葉に端的に表明されている。この「太平洋の橋」とは、「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌」（『洋行の動機』『帰雁の蘆』『全集』第6巻 p.20）を意味するものであった。アメリカ、ドイツに留学し、晩年には国際連盟事務局次長や日米交換教授としてアメリカの大学で日本文化の公演活動を行うなど、生涯を通じて、国際交流活動へと新渡戸を動かした力とは、幼少期における異文化接触の体験の中で培われたと思われる。

新渡戸は少年時代より西洋文化に触れる生活を送っていたことは先に見てきたが、その頃から彼には「洋行」の夢があった。「僕等少年の最大の目的は、一度洋行して後で参議に成るのであつた」（『帰雁の蘆』『全集』前掲 p.19）と述べるように、国家の指導者として西洋の見聞が必要であるとの認識がここで示されている。この認識の背景には、1860（万延1）年に福沢諭吉が咸臨丸に乗り、アメリカへ、1871（明治4）年に岩倉使節団が

欧米諸国を巡遊したという「洋行」した知識人の存在が考えられる。新渡戸は、「洋行」の動機について、次のように述べる。

苟くも学に志す以上は、自分の知識発展、心の修養、人として己に羞ぢず、地に低くとも天に高く、人に卑しめらるゝも神に愛せられんには、第一己を磨かざるべからず、それには広い世界に出なければ、唯々遅れるのみと思ひ定めたのが、洋行直接の動機であつた。

『帰雁の蘆』前掲 p.21

「大学の授業に愛想」（『宮部金吾宛書簡』1884（明治17）年4月20日『全集』22巻 p.237）をつかし、「己を磨く」目的を持ち、1884（明治17）年にアメリカへ、続いてドイツに留学した新渡戸は、海外の大学において講義による知識獲得に優る外国の人々との「交際」を体験した。

外国の大学で一番利益になると思ふのは、決して教場で聴く講義ぢやない、親しく教授或は少数の篤志な学生と交つて、或はビールを飲みながら、或は一小室に籠りて演習的研究をすることである。

『帰雁の蘆』前掲 p.84

ここで、新渡戸は、教師からの一方向による「講義」よりも、「演習」という教師と学生との双方向の対話という教育方法に高い評価を示している。彼が体験した「演習」は、従来の読み書きという教育手法ではなく、意見交換、即ち、コミュニケーション能力を重要視するものであり、「教授の人格或は同学生の人格に直接に相触れる」（『帰雁の蘆』前掲 p.85）絶好の機会を提供するものと理解された。それは、参加者同士の言わば「交際」の場として機能し、新渡戸は、そこで、西洋における人間関係のあり方を観察したと考えられる。

さて、ここで想起されるのは、新渡戸が第一高等学校長時代に行っていた「面会」である。新渡戸の教え子のひとりである前田多門によると、そ

れは、「学校の近所に一軒の家を借受けられ、そこを校長の面会所と定めて一週一回定日を設けて、生徒の来訪のために開放し、塩煎餅に渋茶を啜って誰彼の区別なく、胸襟を開いて談笑」する場<sup>(5)</sup>であった。これは正しく「演習」の内容と一致する。「面会」は、新渡戸の西洋体験を教育現場に活かした例として注目すべきものである。次に、新渡戸における西洋人の印象について見てみよう。

## (2) 西洋人の印象

『帰雁の蘆』には、新渡戸が体験した海外でのエピソードが豊富に語られている。そのなかで、海外での日本人の「交際」について「馬鹿にされる気味がある」（『帰雁の蘆』『全集』6巻 p.72）との指摘がある。新渡戸は、その理由を次のように語る。

理由は第一風采に在る、色は黄黒だし、鼻は低し、頬骨は凸然、身長は矮く、一言以て之を蔽ば不格好である為め、初めから敬意を受けることは難い。丁度吾々が黒奴を見れば寧ろ軽蔑するの念が起ると同じ所以である。

『帰雁の蘆』前掲 pp.72-73

これは、新渡戸が体験した西洋における日本人の待遇の一端を示すものである。新渡戸は何度も「支那人」と間違われたと語るが、このような人種的差別を実感しながらも、彼の著作のなかで、西洋の悪い印象が語られることは、ほとんどない。逆に、「日本より西洋に親切が却つて多かりさうだ」（『帰雁の蘆』前掲 p.51）、「僕がハレに居る頃下宿の主人夫婦は人柄の頗る良い奴」（『帰雁の蘆』前掲 p.103）と記すなど、新渡戸が西洋人に対して抱く印象は良いものが目立つ。それは何故なのだろうか。

それを解く鍵は、1928（昭和3）に早稲田大学で西洋事情に関する連続講義を行った際の言葉にある。

よりよいことを御紹介したいのである。他

山の石一とでもいふべき節々を述べたいので、短所を述べる必要はあるまいと思ふ。

『西洋の事情と思想』『全集』6巻 p.480  
新渡戸が記す西洋人に対する良い印象には、他者との関わり方についての新渡戸の基本的な姿勢が反映されていると考えられる。

人の欠点は成るべくこれを見逃し、其善い方面を見て、善い動機を察するが可いと思ふ。かうすれば或は誤まることもあらう、或は人を買ひ被ることもあらう。併し誤つても、買ひ被つても、人の長所に頼む方が最後の勝利となる。

『世渡りの道』前掲 p.72

このような「長所」や「善い方面」という表現は他の箇所でも散見される。新渡戸は、他者の欠点や短所を見ることを極力避ける。彼は、他者との争いを否定し、排除することにより、自己と他者との全面的な信頼関係を基盤とする「円満」な人間関係の構築を理想とした。人間の親和的な関係は、彼の理想とする国家である「徳治国」（『世渡りの道』前掲 p.330）の基盤となる重要な構成要素とされたのである。

新渡戸は、その他者の「長所」に注目する「交際」を通じて「礼」の重要性を認識したと考えられる。「長所を見れば、自然に其人に対する尊敬の念が湧き、礼節を守れるようになる」（『世渡りの道』前掲 p.96）と言うように、「礼」、新渡戸の言葉で言えば、「ソシアリチー（共同生存する性質）」（『世渡りの道』前掲 p.113）を人間関係の基本とし、修養論において重視するその原点は、西洋の「交際」に見出すことができるのである。

### 3. 日本人の変革

#### (1) 日本社会への危機

新渡戸は人間を「社会的の活物」（『教育の目的』『随想録』『全集』5巻 p.231）、「社交的の活物」（『教育の目的』前掲 p.230）と規定する。人間は、孤

立して生きていくことはできない。人間は、他者との関わりを通して人間社会を形成していくとともに、人間社会のなかにおいて他者との関係性のなかでのみ生きることが可能な存在である。新渡戸の人間観には、鎖国時代が幕を閉じ、日本人が国際社会の中で如何にして生き延びていくのかという時代の要請も反映していると思われる。

彼がしばしば日本人の性格を「島国根性」（『島国根性』『随想録』前掲 p.38）と指摘し、批判する。この特徴は、加藤周一氏も指摘するように<sup>(6)</sup>日本人の孤立的な、排他的な性格を意味する。新渡戸は、従来の「島国根性」を打破し、他者との親和性を深め、「社交」的な性格への転換が日本人に課せられた緊急課題であるとの認識があったと思われる。そして、その危機意識は、新渡戸の教育観にも見出される。彼の「円満に人々と交際をして行けることが教育、即ち学問の最大目的」（『教育の目的』前掲5巻 p.230）という言葉には、近代日本における教育が資本主義を発展させるための実業的な教育を推進するものであったことへの批判が込められ、知識偏重の教育環境に対する新渡戸の危惧が表れていると考えられる。資本主義は労働者と資本家を区別し、人間社会の分断をもたらす。その社会的矛盾が表面化しつつあった当時、新渡戸は人間の不和の解消を教育に求めた。

さて、1900（明治33）年より2年間、ロンドンに留学した日本人に夏目漱石がいるが、漱石は他者との接触を避けるなど、新渡戸の「洋行」と比較するとその印象は対照的であったと言える。新渡戸の「永らく外国に遊んで、如何なる利益があつたらうと顧ると、偉らい人間に逢つた事だ」（『世渡りの道』前掲 p.126）という言葉からわかるように、彼は、他者との出会いを「留学中の最大の賜物」（『世渡りの道』前掲 p.127）とした。この「偉らい人間」とは、社会的身分が高いというのではなく、「天爵の高い」、「大きく常識の伸びた人」（『世渡りの道』前掲 p.127）の意であった。それは、だれかれ区別なく、親和的な人間関係を

構築できる人であり、西洋において発見した新渡戸の理想とする人間のことなのであった。

## (2) 西洋の「長所」の摂取

新渡戸は、『西洋の事情と思想』のなかで、「広く西洋から知識を吸収しなければならぬ」、「西洋を措いて、他に知識を求める所はないやうに、私には思へる」(『西洋の事情と思想』前掲 p.576)と述べ、西洋思想の受容を主張する。それは、彼が「進歩といえは西洋」(『日本西洋化の性格』『随想録補遺』『全集』21巻 p.335)と語るように、日本の近代化には、西洋の「長所」を積極的に摂取することが不可欠であった。しかし、その摂取は無制限になされるのではない。「西洋」の風俗習慣を無分別にとり入れているのをみると、うんざりします。なぜわれわれは、もっと自尊心をもち、われわれ自身の伝統を尊重しないのだろうか?」(1887(明治20)年8月7日「宮部金吾宛書簡」『全集』22巻 p.274)と言う言葉には、留学間もない頃より、新渡戸が抱いていた日本人としてのアイデンティティを尊重する姿勢がはっきりと表れている。この姿勢は後年まで一貫して変化することはなかった。では、「西洋」の「長所」とはどのような点なのか。

新渡戸は、『西洋の事情と思想』で、西洋人の性質の特徴を大きく3分類する。第1に、「プラクチカル」(『西洋の事情と思想』前掲 p.560)、つまり、実行すること。新渡戸は親孝行の例を示し、「理屈」から出る行為ではなく、「親を思つて思つて堪られなくなる、その真情の迸りが、真の孝道」(同上 p.560)と述べ、日本人以上に西洋において孝行が行われていることを紹介する。第2に、「パーソナリティー」(同上 p.563)を尊重すること。これは人格の尊重であり、キリスト教の特徴と新渡戸は理解する。第3に、「理性に富」む(同上 p.611)ことを挙げる。次に、日本人の特徴として、第1に、「プラクチカル」ではなく、「理論に走る」(同上 p.560)こと。第2に、「独立心が乏し」く、

「コンミュナル、共存性」(同上 p.603)が発達していること。すなわち、世間の目を気にすること。第3に、「直観的な心的能力を持つ」(同上 p.611)つことを挙げる。

ここから、「プラクチカル」と「パーソナリティー」の尊重が日本の摂取すべき点であったと考えられる。そして、これらを西洋の「長所」と認識した新渡戸は、修養論のなかで、その重要性について説くのである。次に、「パーソナリティー」の尊重に着目し、新渡戸における「礼」と「情」の理解について、その特徴を考察していこう。

## 4. 「礼」と「情」

新渡戸は、「人と人との関係は礼と情とを以て結びつけねばならぬ」(『世渡りの道』前掲 p.44)と述べ、その関係性の上に構築された国家である「徳治国」、「礼治国」を世界の「発達」した段階と捉える。(『世渡りの道』前掲 p.44)

「礼」について、新渡戸は「礼儀なるものはその根本に於て東西の区別はない」(『東西相触れて』『全集』1巻 p.367)とし、「礼」に国境を越えて共通する普遍性を見出している。その普遍性とは、東西の地理的な相違による人間の区別を否定する新渡戸の人間観の根幹をなす。

日本人はあくまで日本人だ、日本人には西洋人のことはわからないとか、同様に西洋人のまた日本人のことはわからぬ、といふやうな議論をしばしば聞くけれども、西洋人も人ならば、日本人も人である。人としての共通点があり得るならば、東西の差異を論ずると同時に、またその共通点をも大いに記憶してゐなければならないと思ふのである。

(『東西相触れて』前掲 p.637)

新渡戸は「人」という共通項を設定する。人間に東西の別はない。その普遍的平等の根底には、彼のクエーカー派を通じたキリスト教信仰が反映

していると考えられる。即ち、万人の心に平等に内在する「内なる光」(Inner Light)による人間の平等である。そのような人間において、互いに人格を尊重することにより、「自分より優れた相手の長所を、衷心から思ふのが外部に現はれた」(『世渡りの道』前掲 p.108)「礼」による「交際」が可能となる。

「情」は、「義理人情」や「旅は道づれ世は情」など、日本における人間関係を示す言葉として馴染み深い。相良亨氏は、「情」を「ただ人は情あれ」という日本中世の慣用句を取り上げ、「他者のあわれに同情共感するもの」、即ち「愛情」であると指摘する。<sup>(7)</sup> 他者への「愛情」は他者を尊重することにより生じる。それは、先の「パーソナリティー」の尊重に結び付く。「他人の人格を認むる以上は、必らず何等かの長所があり、惜むべきの点がある。之を発見し之を惜むことでこそ、始めて世は情といふことが味はれ」(『世渡りの道』前掲 p.249) 新渡戸は、自他を結ぶ「情」を、「人間の先天的性質」(『世渡りの道』前掲 p.44) と理解した。

以上から、新渡戸は、「情」、「礼」に普遍性を認めていることがわかる。そしてそれらを発揮する「交際」とは、東西による人間の区別を超えたところに成立する親和的な人間関係なのであった。

## おわりに

以上、考察してきたように、新渡戸は「情」や「礼」による親和的な人間関係の構築を主張したが、そこには西洋における新渡戸の「パーソナリティー」の尊重に基づく「交際」の体験が反映されていることがわかった。そして、この親和的な人間関係に、日本人として、更には人間として理想的な在り方を見出した新渡戸は、それを、『世渡りの道』を中心とする修養論のなかで、将来の日本を担う青年たちに向けて積極的に説いた。

大久保喬樹氏が、「洋行」を「日本の近代化す

なわち西洋化の先導隊であり、縮図であった」<sup>(8)</sup>と定義するが、新渡戸も正しくその「先導隊」の一員であったと位置付けることができるであろう。西洋の見聞について、福沢諭吉は『西洋事情』や『文明論の概略』においてまとめた。新渡戸もまた、一高校長や東京帝国大学教授としてエリート教育に従事するとともに、そのような教育機会に恵まれない庶民に向けても、「通俗」雑誌や、修養書などの執筆を通じて発信した。それらの著作は、未知である西洋に対する読者の関心を高めたと想像される。新渡戸は、エリートと庶民が一体となって、修養の観点から新しい時代に向けた日本の改革を試みた。日本人を普遍的な「人間」として捉え直すその試みに、日本の近代化のひとつのあり方を認めることができるであろう。

## 付記

本稿は、比較日本学教育研究センター（プロジェクト名：哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究）所属の客員研究員と行っている近代比較思想研究会における成果の一部である。

## 註

本稿における新渡戸稲造の著作からの引用は、『新渡戸稲造全集』教文館（1969-2001）による。

- (1) 『修養』は1911（明治44）年9月に発売以来、1914（大正3）年に29版、1929（昭和4）年には137版を重ねた。また、『世渡りの道』は1926（大正15）年に72版、1929（昭和4）年には86版を重ねている。（『全集』7巻 解題 p.691、8巻 解題 p.591）
- (2) クェーカー派（Quakers）とは、キリスト教プロテスタントの一派であり、万人の心のなかには平等に「内なる光」(Inner Light) が内在すると信じる。彼らの社会活動は、その光の普遍性に基づくものであり、万人に対して博愛の精神を持ち、接するという態度から、権威に対して否定的であるという特徴を持つ。新渡戸は、アメリカに留学中の1886（明治19）年、ボルチモアにおいて教徒となった。

- (3) 照井悦幸「新渡戸稲造に学ぶ国際社会の「世渡

- りの道」—二一世紀人間像の理想—」盛岡大学文学部『文学部の多様な世界』教育史料出版会 2003 pp.197-215)
- (4) 共慣義塾は湯島天神下にあり、旧盛岡藩の子弟が多く通った。
- (5) 前田多門「寄生虫としての感想」『全集』別巻 p.184
- (6) 加藤周一「日本社会・文化の基本的特徴」『日本文化のかくれた形』（加藤周一、木下順二、丸山真男、武田清子 岩波書店 2004）において、日本社会と文化の特徴として、競争的集団主義、世界観の此岸性と超越的価値の不在、現在主義が相互に関連していること、極端な形式主義と極端な「気持」主義を備えた価値体系による行動様式を「パラダイム」に挙げる。そして、そのような文化が外に対して閉鎖的であると指摘する。pp.17-46
- (7) 相良亨『日本人の心』p.12 東京大学出版会 1984
- (8) 大久保喬樹『洋行の時代 岩倉使節団から横光利一まで』p.211 中央公論新社 2008